

# 卷 頭 言

木簡学会設立以来の会員でありながら、今まで木簡出土の現場に際会し、調査・解説にあたるという機会を得なかった。ところが一九九〇年になって、委員をしている福岡市の鴻臚館跡から待望の木簡が出土し、それを手に取って調査することになった。最初、現地の折尾学・山崎純男氏などから、赤外線カメラで判読した木簡の釈文の案を送っていただいた。「京都郡庸米六斗」「鹿脯乾」などと記した木簡が並んでいたが、私の眼にとまったのは「□羅□□長□一□」の文字のある木簡であった。鴻臚館跡という場所との連想から、「羅」は新羅かなと一瞬思ったが、「鹿脯乾」と並出しているところからすると、「耽羅鰺」ではないかと思うようになった。その少し前に、奈文研の森公章氏の『続日本紀研究』誌に載った「耽羅方脯」に関する論文を読んでいたせいかも知れない。「鹿脯」は『延喜式』では甲斐・紀伊・筑前・肥後・豊後の中男作物として見えるが、「耽羅鰺」も肥後・豊後の調として見える。西海道の特産物であり、鴻臚館にそれが運ばれている可能性は強い。私は期待をもって九州へ飛んだ。

福岡市役所に着いて木簡の現物に直面する。見れば見るほど「耽羅鰺」に見えてくる。しかし私の推測はあっけなくくつがえされた。同じ委員の渡辺正気さんが、「これは『庇羅郷』ですね。今の平戸です。これは平戸の初見史料になるのではないですか」と言われる。言われてみればなるほどその通りである。先入見にとらわれず虚心に実物に対さなければならぬと、あらためて自分がまだまだ木簡研究の初年兵であることを悟ったのであった。

前号の巻頭言での田中琢氏の発言は、多くの反響を呼んだ。最近の木簡学会は、木簡という鯁節を喰いあさるネコの集まり

になっている。木簡は単なる文字史料としてしか見られず、木簡学会は木簡に関する新しいニュースの入手のための組織としか見られていない。木簡学会は設立の初心に立ち返り、木簡そのものを研究する学会としての道を歩むべきだ、というのが田中氏の意見であった。文献を扱う古代史研究者の私にとっても、まことに耳の痛いことであった。毎年、十二月の研究集会の翌週の大学院の演習には、当日の資料のコピーを配布し、新出の木簡について道聴塗説の解説をするのが例であったから、これでは奈良みやげの鯉節を分け与えるネコと言われても仕方がないと思ったことである。

木簡が、記された文字面だけを追うのではなく、その形態や材質、書風をはじめ、出土した遺構の性格や共伴する文化遺物などを総合的に検討することによってはじめて多くを語るものであることは、頭でわきまえてはいても、その研究方法を自分のものとすることは、文献研究者にとってなかなか難しい。自分自身の場合も、木簡学会に参加し、多くのすぐれた研究に接することによって、初めて木簡学のありかたに眼を開かれたと思う。これは他の会員、ことに文献を扱う研究者の多くにとっても同じではなからうか。学会は完成した研究者の集団であって初年兵訓練の場ではないと言われればそれまでだが、史料をあるだけの欲張りネコに木簡学の真のありかたを教え、自己の非を改心させる場としての意味があってもよいと思うが、如何であろうか。

田中氏の問題提起に関連して、中世史家の石井進氏も、日本の古代史研究の現状は余りにも安定しすぎていて、大方の研究者は、既成の研究成果の大枠に寄ったまま、部分的な個々の論議に熱中しすぎている。木簡に代表される新出の文字資料群も、ちょうどその部分にスッポリはまりこむものだけが脚光をあびているということはないか、と疑問を投げかけている〔「中世史からの期待」『新版古代の日本』月報一、角川書店〕。石井氏は、古代史研究にはもっと一種の「ペレストロイカ」が必要ではないか、と苦言を呈しているのだが、古代史研究の新たな道を模索するためにも、会の原点に立ち返ることがいやおうなく我々に要請されているように思われる。

(笹山 晴生)